哲學研究　第百八十七號

プラトンは如何に哲學し始めたか（上）

後藤孝弟

プラトンの名に依つて我々に傳へられたる精神的遺産の全體的なるものに、殊にもプラトンの一切の所産を貫いて流るゝソクラテスの人格そのものに直接觸れやうと此の小論は試みるものではない。又はプラトンの哲學體系が如何なる構造を持つてゐたかゞ問題とされやうとしてゐるのでもない。只如何に若々しき情熱と不屈の努力とを以つてプラトンは哲學し始めたか、プラトンの全人的活動の中に哲學は如何に自らなる力を以つて生ひ立つたか、更に言ひ換へればプラトンに於て「活けるロゴス」ἔμψυχος λόγος が如何に顯はれ始めたかを知らうとするのがこの論の意圖である。我々は先づプラトンの初期對話篇プロタゴラス、ゴルギアス、メノン、の三篇を出發點として論を進めて行き度いと思ふ。

以下「　」は直譯して示し『　』は要譯、意譯を引用せるを示す。

序論

プラトンの對話篇に於てソピステスが重要なる役割を演ずるのは主として初期のそれらに於てゞあつた。而して此の事はプラトンの思想の發展に取つて全く本質的なる事柄であつた。眞理のいのちを死守しやうと努力したプラトンに對して不思議な力を以つて迫つて來たソピステスの姿をあり〳〵と思ひ浮べる事の出來るのは初期の對話篇に於てゞある。斯くの如きソピステスの如何なるものであつたかを我々は便宜上次の六つの項目に分つて追求して見やう。(一)問題の提出(二)プロタゴラスの德論(三)ゴルギアスの雄辯術(四)カリクレスの權力說(五)ソピステスの對話に於ける態度(六)ソピステスの本性。

(一)問題の提出　先づソピステスなる語義は如何なるものであつたか。試みにギリシヤの辭書を見るならばソピステスの項の下に種々なる意義が見出さるゝのみならず全く反對の意味卽ち善意に取られるものと惡意に取られるものとすらあつて何れを取つて解す可きかに迷ざるを得ない。然しソピステスなる言葉は非常に古きものでありその內容は幾多の歷史的變遷を經過したものであつた。凡そ一藝に長じたる者例へば詩人音樂家及び所謂七賢人の場合の如く單に智者の意味に於けるソピステスは最も古く、紀元前五世紀頃に到つて德或は辯論の職業敎師の意味

現はれ、詭辯家としてのソピステスはそれより後の事であつた。プラトンの對話篇に於てもソピステスは以上の如き種々なる意味に解せられて居り單純な意味のものとはされて居なかつた。それでは今問題とされ樣としてゐるソピステスは其等の中の何れに屬する者であるか。アリストテレスは主として職業敎師及び詭辯家としてのソピステス、殊に惡意に取られるソピステスを問題とし、後ソピステスと言へば多く是の意味に解せられて來た。我々も大體に於てアリストテレスが向つた所の者に向ふのであるが必しも彼の解した者とする必要もなく、又一部の偏見に從つて惡しき意味に之を解しやうとするものでもない。むしろプラトンが有意無意に之と戰ひ拔 διαμαχεῖσθαι いた所の一切のものを代表するものとしてソピステスを考へて見度いのである。

そこで、プラトン哲學に對立する限りとしてのソピステスは何であつたかゞ問題となつてくるのである。然らば此の問に對する答は簡單であらうか。我々は否と答へねばならぬ。ソピステスの本性を明確に規定する事は殆ど困難な事であるのみならず正當なる意味に於ける概念規定は全く不可能であるとさへ考へられる。而して此の事はソピステスの本質に屬した事で全く必然的な事であつた。プラト

ンもそのソピステス篇に於てソピステスの定義を求めんとして多くの迂餘曲折を經たが、終にその不可定義的性質のため之を多頭的(多岐的)πολυκέφαλος と呼んで嘆息した程であつた。ソピステスを論に依つて追ひ求めても之を捕へて見ればそれは全體の中の一部分に過ぎぬ事を發見するのである。それは如何にするも明らかなる形に於ては捕捉出來ないものであつた。然し只一つ謂はゞ消極的なる規定の道が殘されてゐた。そしてプラトンも亦此の道に向ひ終に多頭的怪物ソピステスを捕へたのである。されば我々のソピステスに對する態度も是より以外にはない。我々は此の事を自覺しつゝ怪物ソピステスの狩に向はねばならぬ。然しプラトンの取つた消極的規定とは何であるか。プラトンはソピステスを懸命に追ひ求めたが何うしても之を捕獲出來ず、最後に τὰ μὴ ὄντα の柵を設ける事に依つてまはりからその逃げ道をふさいだのである。それは τὰ ὄντα の中に入つて來ぬもの規定出來ないものゝ存在をも認める事による限定である。然し我々はプラトンの對話篇に登場して來る種々なるソピステスを各方面から觀察しつゝ進み最後にプラトンの歩まんとした方向と對比させる事に依つて之を規定しやうと思ふ。

(二)當時ソピステスとして名聲並びなきプロタゴラスに憧れて心祕かに彼に學ん

で國家の有爲の士たらん事を志望してゐたアテナイの青年ヒッポクラテスは「君はソピステスを何であると考へてゐるか」とのソクラテスの問に答へて「その名が示す如く諸智の有智識」とし、更に「諸智の中の何の」と問はれて「語るに畏る可き者を作るの智者」と答へたが「何に就いて語るに畏る可きものを作るのか」との問に對しては最早之に答へる事は出來なかつた。そこでソクラテスはヒッポクラテスを伴ひ、この問題を提げて當時カリアスの邸宅に賓客となつてゐたプロタゴラスを訪問した。そして同じ問を提出した所、プロタゴラスはその敎ふる學課を數學天文學音樂等から區別して「私の許に來た者は只々その爲に來た其事をのみ學ぶのだ。而してその學課は一家を最も善く齊へ而して一國の事に就いては之を行ひ又語るのに最も有力とならんが爲めの思慮分別 εὐβουλία である」と答へ然らばそれは「政治の術」であり「市民として善き人々」を作るものであるかと問はれて之を肯定した。然し斯くの如き智識は之を人に敎ふ可き可能性を持つてゐるのであらうか。當時術(テクネー)と言はれてゐたものには醫術、體操術、音樂術等その他多くのものがあつたが是等は其々獨立した領域に於ける事柄に就いてのテクネーであつた。そして適當なる方法に依れば人に敎へる事が出來それ自身に完成せる智識であつた。然るにプロタゴラ

スが今諸他のものと區別しながら唱へ出した新しきテクネーは如何なる領域を持つてゐるか、そして果してそれは人に敎へられるものであるか。於之ソクラテスは事實を擧げてその疑問とする所を質さうとした。卽ち諸他のテクネーは其々犯す可からざる領分を持つてゐて門外漢が餘計な差出口をすれば忽ち非難される。然るに國家の事に就いては何人が之に就いて論議しても少しも怪しまれぬ。又賢人として何人も認むるペリクレス如き人物にしても尙且「諸敎師から得らるゝ事柄」に就いてはその子供等に美しくも良く敎育したが「彼自身が智者である所以の事柄」に就いては自ら之を敎へもせず人にも委ねずに放置した。ソクラテスが指摘した此二つの事實はプロタゴラスのテクネーの領域を問ひ其がテクネーの名に眞に價するかを問ふてゐるのである。そして更に其テクネーの內容の本質に觸れて問ふてゐるのである。プロタゴラスは之に對して神話の形式に依つて都市(國家)成立の由來から說き起して其德についての論を述べ立てた。彼に依れば『法 δίκη と法を畏れる心とはゼウス神に依つて「萬人にわたり」「萬人は俱有すべし」として凡ての人々に賦與されたものである。それ故或限られたる人がではなく凡そ人たる者は何人も正義その他の政治的德を持つて居り又持つ可きである。然し德は自然に φύσει 有るの

でもなければ偶然に來るのでもない、むしろ敎へらる可きであり、世話 ἐπιμέλεια に依つて來る者には來るのである。何となれば人は「自然に又は偶然に持つてゐると考へられる限りの惡い事」例へば美醜矮小虛弱等に就いては何人と雖も之を非難せずむしろ哀れむ。所が「世話や練習や敎育に依つて人々が持つ限りの善い事」に於て若し人が缺けてゐるならその人は非難される。そして其等の事に對してのみ懲罰が存在する。凡て懲罰は既に過ぎ去れる不正事に對してゞはなくむしろ將來再び罪を犯さぬ樣にと行はれる。この事實は德は敎へられ付與せられ得るものなる事を示してゐる。『プロタゴラスは德をば自然から區別し世話に依つて與へられるものであり努力に依りて學ばる可きものとし、更に凡そ人間たる者は何人も學ぶ可きものとした。それは德は自然に屬するものでないと同時に凡ゆる人に普遍的なるものなる事を示してゐる。更に其德の如何なるものなるかに就いて彼は說明を續けた、卽ち『苟くも都市(國家)が成立する爲には何人でも市民たるものは其を俱有せねばならぬ樣な一者がある。其は建築の德でもなく製陶製靴の德でもない。其は正義の德節制の德敬虔の德等をも一括して居るもので私は其を人間の德 ἀνδρὸς ἀρετὴ と呼んでゐるのである。凡ての人は之を持つ可きであり如何なる事を爲すにして

も之を缺いて居つてはならぬのである』德（ἀρετή）は實際的效用を備へたる善といふ程の意味を持つて居り、諸他のテクネーが其々アレテーを持つてゐたと同樣にプロタゴラスのテクネーもアレテーを持つてゐた。然し其は醫者が醫術を以て病人に接すると言ふが如きものでなく只々人間としての德であつた。其は更に、正義、節制、敬虔等の諸德をも統一してゐる所の一切の人間的行爲の最高の統一中心である。其は一切のものを其內容としてゐたと共に、諸他のテクネーの個々の領域からすれば何物をも內容としてゐないのである。プロタゴラスのテクネーの內容、領域の規定の困難は其の無內容性に依るに外ならない。

まことにプロタゴラス自身が自らを諸他のソピステスから區別してゐる如く、斯くの如き德の深き洞察は他のソピステスに於ては見られぬ所、プラトンも亦德の敎師プロタゴラスから多くを學び得る所があつたに違ひない。然しその德論は前後の統一を缺いてゐる故我々はプロタゴラスの雄辯に壓倒されぬ樣、彼のテクネーの內容たる德を其が窮局の目的とした所のものに依つて色附けて置かねばならない。彼のテクネーは旣に述べたる如く「一家を最も善く齊へ一國の事は之を語り又爲すのに最も有力なるものと成る樣にとの思慮分別」である。思慮分別とは一切の人間

の行爲を統一して之を其窮局の目的とする所に誤たず向けしむる一種の智恵である。而して此思慮分別こそ彼の所謂人間の德の窮局の姿であつた。彼の德に就いての卓見を思ひ比べる時、殊にも彼自身が人を壓伏し得る德を備へた人物であり多くの人々も彼の德に動かされたであらう事を思ふ時、その「人間の德」を直ちに巧利的なる思慮分別と同一視する事は幾分の躊躇無きを得ないのである。然し彼が「其事(思慮分別)の爲にのみ私の許に來つて學ぶ」と宣言した事は確實なる事として之を信じないわけに行かない。更に彼の德の論を全體に亙つて眺める時、その論の形式に於ける立派さにも拘らず理論的內容に缺除してゐる爲前後の統一を失つてゐる事に氣附くのである。其故に彼の部分的なる洞察的名言に眩惑さるゝ事なく彼が終局の目的とした所のもの彼が宣言した所のものに從つて其德の本性を決定しても豪も不安を感じない。更に彼は德を自然から區別して德は自然に φύσει 來るものでなく世話 ἐπιμέλεια に依つて付與さる可きものとしてゐるのであるが其世話とは如何なるものであつたか。彼の所謂世話は自然的必然なるものへ向ふのでなく人間の努力に依つて可能なるものへ向ふものとされてゐる。然し彼の此の卓見にも拘らず、其德は眞實に正しく自然からは區別されてゐなかつた。其の事は彼の所謂敎

育の世話なるものゝ如何なるものなりしかを知ることに依つて明らかにされるであらう。プロタゴラスに依れば「詩に就いて語るに畏る可きである事は人の教育の中最重大なる部分」であつた。何となれば「詩の中には多くの教訓が含まれ善き勇しき人々に就いての描寫讃美稱揚が極めて多く子供等が憧憬の心を起し模倣しかゝる人物に成らうと意志する」からである。天才を憧憬し模倣するとは如何なる事を言んとするのか明瞭でないが、斯くの如きは德の德たる所以のものを眞に自覺してゐるとは言へない。自然は人間の努力に對しては偶然的であり如何ともなし難きものである。德はプロタゴラスも言ふ如く如何に人間的世話のみでは得らるゝものでなく天性の力に俟つ所大であるとするも、而も尙自然を征服して起つ所に眞に德の德たる所以があるのである。此の自覺の上にこそ正しき德の世話は立脚す可きである。此自覺を缺いてゐた故彼の智惠のひらめきを示す德の洞察にも拘らず、その德の論は終に何ものをも敎ふる所が無いのである。彼の德の世話は全く常識の立場に於ける一種の練習τριβή であつて正しき自覺を伴へる努力の道を示すものでない。彼の德の世話はまことに親切を極めたものではあるが畢竟するに自覺を缺ける常識の立場であつた故、眞に德の尊嚴を認める事が出來ず巧利的なる思慮分

別を終局の目的としたのであらう。然し是は彼一人のことではなく時代の然らしむる所と考ふ可きである。德とはプロタゴラスの「人間の德」に限らず廣く實際的效用を伴へる善であり、而も善 ἀγαθὸν は當時殆ど利 ὠφέλιμα と同樣の意味に用ひられてゐた。其故プロタゴラスの「人間の德」も人間の效用價値と殆ど同一視されてしまつたのも當然の事であつた。

(三)ゴルギアスの雄辯術。我々はプロタゴラスに於ては主として敎育の事を聽いたのであるが敎育者を以て自任してゐたソピステスに取つては敎育の事は其中心的な仕事でなければならなかつた。プロタゴラスに依れば「恰も醫者が藥に依つて人を一つの狀態から他の狀態に移す樣に、ソピステスは言葉に依つて人を一つの狀態からより良き狀態へ移すのである。」ソピステスは言葉を敎育の手段としたのみでなく更にその敎育の內容は言葉の術であつた。然し此の事は德の敎師たるソピステスに取つて單に偶然的な事でなく全く本質的な事でもあつたのである。當時のデモクラシイの世の中に於ては言葉の術は最も有力なる立身榮達の武器であつた。其のみでなく更に次の如き本質的な理由もあつたのである。諸他のテクネーは其々個々の領域內の事柄 πράγμα に向ふ。醫者は病人に接し天文家は天體を觀測

し彫刻家は石を刻む。然るにソピステスのテクネーは其様な特定の事柄(内容)を持たず却つて諸他のテクネーの上に立ち之を支配した。而して如何なる風に支配するかは雄辯術の能力に關するゴルギアスの演説が示して呉れる。之を要約すれば『雄辯術は個人に於ても都市に於ても諸他のテクネーの行使そのものを決定する。若し都市に於て雄辯家と醫者との何れが醫者として選ばる可きかゞ集會に於て問題となるとせば、雄辯家は欲しさへすれば自らを醫者として選ばしめる事も出來る。又其他のテクネーに於ても同樣である。』ソピステスのテクネーは個々のテクネーのプラグマ(内容)に向ふものでなく謂はゞソピア(智恵)にのみ向ふものである。ソピアはテクネーの形式に屬するものである限り其は言葉に關するものと言へやう。一切のテクネーは「沈默に依る σιωπῇ もの」と「言葉に依る διὰ λόγου もの」とに區別される事も出來やうが、如何なるテクネーにあつても形式と内容とを持ち内容は練習に關するが形式は言葉に關すると言へやう。ソピステスのテクネーが諸テクネーを支配したは其等のソピアにのみ關係する事に依つてゞある。其故に言葉に依つて德を敎ふるソピステスは必然的に言葉の術を敎ふる者であつた。「人をして語るに畏る可きものと成す」事がソピステスの目指す所である以上そのテクネーは必然雄

辯術と成らざるを得ない。プラトンは政治術に屬する二つの部分たる立法術と司法術とに其々「ソピステスの術」σοφιστικὴ と雄辯術とを其等の影として其等に對せしめた。「ソピステスの術」と雄辯術とは本質的には同一のものであつたからである。

然しゴルギアスが考へた樣な仕方にて雄辯術は諸テクネーを支配する事が出來るであらうか。ゴルギアスに依れば雄辯術は「人間的な事柄の中最大最善なるもの」に就ての言葉に關する。而して其最大最善なるものとは「人々に取りて自由の原因となると共に、都市に於ては他の人々の上に立つ事の原因」であつた。此原因と言ふは卽ち雄辯術のアレテーであるが、其は「正義、不正義なる所のもの」に關して「言葉に依つて法廷に於ては司法官を、上院に於ては上院議員を、下院に於ては下院議員を說得する事 πείθειν が出來る事である。そして其他如何なる政治的集會に於ても同樣に。」さきに雄辯術が諸テクネーを支配すると言つたのも說得に依るに外ならぬのである。然し說得には「知る事なしに信(ピスチス)を與へるものと知識(エピステーメ)を與へるもの」との二種あるのであるが、雄辯術は知る事なしにピスチスのみを與へる。其故雄辯術は敎育術ではなくして「只々說得的」πιστικὸς μόνον なる說得術に外ならない。エピステーメをでなく知る事なしにピスチスをのみ與へる雄辯術の相手は知

識を缺ける群集或は民衆であつた。まことに「雄辯家は諸テクネーに就いて民衆の意見に相談の相手に成つて之を支配する者」であつた。其故雄辯家は諸テクネーの智者として民衆にエピステーメを與へて敎へるのでなく、諸テクネーの眞實の知識を持たずして無智なる民衆を只々說得する者に外ならない。彼は眞實に諸テクネーの知識を持たずとも持つ如く見せかければよいのである。然し言葉のテクネーを獲得しさへすれば「彼は都市に於て最大の力を持ち何でも好きな樣に振舞ふ事が出來る。」而して此の事こそ雄辯術が終局の目的とせる所であつた。

(四)カリクレスの權力說。ソピステスと雄辯家とは本質的には同じものでソピステスは必然的に雄辯家とならねばならぬ事は旣に述べた。當時ソピステスを輕蔑し自らをソピステスから區別しやうとしてゐたアテナイの有力なる貴族にして雄辯に長じたるカリクレスなる人物があつたが、其說く所極めて極端であつたが爲め或歷史家は彼自らの言明に從つて彼をばソピステスの列には加へなかつた。成程彼は職業敎師ではなかつたらしく、此の點に於ては彼はソピステスではなかつたと正當に言ひ得るであらう。然し彼がソピステスを輕蔑したと言ふも實際家の立場から職業敎師を觀察しての事であつたとも考へられる。而して其思想內容から言

ふなら其極端なる破壞的思想も本質に於てはソピステスの思想と何等異る所なく只其考ふる所を極めて大膽に且明瞭に言ひ表したものに過ぎぬのである。彼は自然法φύσις と人爲法νόμος との對立をば美、善、正義等の領域にも認めた。『ピュシスに於ける正義はノモスに於ては不正義でありそして又其逆も同樣である。多數者にして弱者なる者が彼等自身の利益の爲に人爲法ノモスを立てた。卽ち力ある者のみが勝れて富財を持つ事を怖れ、人よりも多く持つ事を望むは醜であり不正であるとし、人と同じ位持つ事をすゝめる。是等は凡てノモスに於ける美醜善惡であるがピュシスに於ては其とは全く逆である。卽ちピュシスに於ては劣れる者より多く持ち無力者よりも有力となる事が正義である。何處の都市如何なる種族に於ても劣れる者を支配し、より多く持つ事は一般に正しいと考へられてゐる。クセルクセスは如何なる正義を以てヘラスを遠征し、又其父はスキタを征伐したのであるか。明らかに彼等はノモスの正義に依つてゞはなくピュシスの正義に依つて其等を爲したのである。』

斯くの如きピュシスとノモスとの對立の思想はカリクレスの始めたるものでなく當時一般に行はれてゐたものであらう。德の領域に於けるピュシスの存在は此

の論も示す如く明らかに實際に屬する事柄である。然し此論はピュシスに對して全き正當性に於てノモスを立てゝはゐない。而して此のノモスの根據附けの不充分はプロタゴラスの德論に於ても既に之を認めた所である。從つて此論はピュシスとノモスとの對立を說くも結局ピュシスのみを認めてノモスは認める事が出來なかつた。其故必然ピュシスはノモスに對して優位のものとされてしまつたのである。『思ふに天性に於て力を持つ者が成長するや凡ての束縛をふり捨て凡て我々の持つ規則ピュシスに反する法律を地に踏み附けて我々の上に支配者として起ち上る。其時にこそピュシスの正義は輝き出すのだ。若し哲學する事なぞ止めてより重大なる事に來るなら此の事が分るであらう。哲學は若い中丈けやるなら良いが長じても尙必要以上に哲學する者は必然美しく有名なる人となるに必要な事柄に無經驗となり、人の笑物となり、三四の若者を相手に街角でブツ〳〵言つて餘生を暮すの外はない。』而してカリクレスは哲學を餘計な飾り、馬鹿氣た事とし、斯くの如きは振り捨てゝ「世事に長ける事」πραγμάτων εὐμουσία に氣を配れと說いた。まことにカリクレスは大膽に且つ明瞭に「他の人々が心の中に思ひ廻らしてはゐるが、而も敢て口に出して言はうとせぬ事を言つて退けた」ものである。都市生活を破壞するが

如き極端なる彼の說も、如何に彼は自らをソピステスから區別しやうとしたとは言へ、其根底に於てはソピステスと何等異る所はないのである。人を自由に支配し思ふがまゝに振舞ふ事こそ雄辯術のアレテーとしたゴルギアスに於ては勿論の事「人間の德」を自然から區別しながら其世話を說いたが而も正しき自覺を缺いてゐた爲、德に於けるピュシス以外のものを認め得ざりしプロタゴラスに於ても既に明瞭にカリクレスの破壞的思想と同根なる物を認める事が出來るのである。

(五)對話に於けるソピステスの態度。ソピステスは如何なる態度を以てソクラテスとの對話に臨んだかを明らかにする事はソピステス其ものゝ規定に役立つ事であらう。

ソピステスは辯舌を得意とし之に依つて敎育し又之を敎へてゐた者故、ソクラテスとの對話に於ても屢々演說を始めた。然し對話に於ては演說は其進行を妨害するものであつたからソクラテスは之を「長廣舌」μακρολογος として嫌つたのである。そして長廣舌は止めて一問一答に依つて對話を進める事を主張するが、ソピステスが何うしても演說を止めぬ時は屢〻見切を附けて對話を中止しやうとさへした。ソクラテスの對話は問ふ者と答へる者との共同の仕事で問答は狩に喩へられ獲物は

論であつた。獲物たる論を追ひ詰めて終に之を捕へる迄對話者は問答に依つて其獲物を見失はぬ樣懸命に之を追はねばならない。然るにソピステスの演說は斯くの如き對話の使命を無視して、一人で長廣舌を揮ひ論の追求を妨害して了ふ。ソピステスの演說は出來る丈け重々しく、美しく巧妙に或は詩の講釋や神話の形式に於て或は空虛なる言葉の遊戲に依つて長々と繰擴げられる。そして凡ゆる手段を盡して聽手を魅惑し煙に卷き有無を言はせず說得しやうとする。ソクラテスが之を一種の暴力の如くに考へて極力之を排斥阻止しやうとしたのも理の當然であつた。

ソピステスは演說を得意としたのみでなく又よく議論をも好んだ。然し其議論は相手に反對して論を立てゝ之に打勝たんとするのみのものであつた。ソクラテスの對話に於ては對話者は友情に結ばれて居るのであるがソピステスの議論に於ては互に敵意を以て對立し所謂爭論的であつた。對話に於ても論駁は盛に行はれ相手の論が誤つてゐれば之を打破るのに少しも呵責する所が無いと同時に自己に誤あらば進んで論駁を受ける。而して其目的とする所は只論を追ふ事以外にないのである。然るにソピステスの論駁は何ら求むるものを持たず、只相手を倒して自己の優位を示さんとするのみで、彼の笑ふ可き誤れる論理の遊戲としての詭辯法も

斯くの如き要求から生れたものであつた。ソピステスの詭辯法は既にツェノン等に依つて其道を開かれ、ソピステスは是を利用發展せしめたと考へられるが、ツェノンの方法は理論の無力を積極的に主張せんとする學的懷疑論の上に立脚してゐるが、ソピステスの詭辯法は單に理論を缺除せる其立場から要求されたものに過ぎない。其故ソピステスが弄した詭辯論そのものはソピステスの規定に取つてさして重要性を持たぬと考へられる。

ソクラテスとの對話に於てソピステスの取れる態度の中最注目を惹くは其議論の據所として常に事實にのみ賴つてゐた事である。自己の議論の支持論駁の根據として事實的な事柄を持つて來る。ソクラテスに於ても論を進める時事實を證據として用ふる事もあるが、其は單に事實にのみ賴らんとするのではなく事實の中に潛みかくれてゐる論を目指してゐるのである。然るにソピステスは論を追ふて事實に來るのでなく事實の中に韜晦してしまふのである。或ソピステスは不正を爲して富み且力を得るより不正を受けて富まぬ方が幸福に近いといふソクラテスの論に對して『其では彼のアルケラオスは幸福ではない事になるではないか、彼は不正に依つて其地位を得てゐるが私は幸福だと思ふ』と答へた。之に對してソクラ

テスは『君の論駁には全アテナイ人及び多くの知名の人々が證人として加擔するであらう。然し私一人は其に承服しない。君の論駁は眞理に對しては全く無價値のものであるから』と答へ、更に續けて『其では多數人を氣に掛けず君と私との論の喰ひ違つてゐる所を明かにしやう』と云ひ對話を正しく導いて行かうとする。然しソクラテスの熱心なる誘導にも拘らずソピステスは常に對話から脱出して其信ずる事實に隱れやうとする。論を進めて行くソクラテスに對して「成程」「左樣だ」「尤も」等の返事を以て同意を示してゐるがソピステスの最後の腹の中は「オヽ、ソクラテスよ私には其は腑に落ちない。前からの議論の行掛りで其は君の爲めに同意されはしたが」であつた。一般の人々が同意する如き事柄のみを確實なものと信じ其以外の一切は空虛な飾りに過ぎぬとしたソピステスに取つて此事は當然であつた。如何に論に依つてソクラテスの爲に論破され盡しても始めからソピステスは信じ賴む所を別に持つてゐるのである。其の賴む所にのみ固執してゐたので如何にソクラテスに誘はれても廣い論の狩場へ勇敢に出て來る事が出來なかつたのである。

(六)ソピステスの本性。我々は以上ソピステスを色々の方面から眺めて來たが、本來彼等には其「何故」を問ふ事は出來ず「何」を問ふより外無かつた。既に述べた所に依

つて明らかなる如くソピステスは實際的な事柄(プラグマ)の中に埋れてゐてアイチア或はウジアを求め樣としなかつた。プロタゴラス、ゴルギアス、カリクレスは其々異れる色彩を持つて居り、殊にカリクレスは職業敎師としてのソピステスの中へは加へられて居らぬのであるが、而も彼等を一括してソピステス的と云ふ事が出來るは此處に共通點を持つてゐたからである。其共通的なるものは何であつたか今一度振り返つて見やう。

ソピステスは元、一定の理論の上に立ちて主張する學派の如きものでなく、相互間に何等の結合も無く寧ろ反目し勢力を爭ひつゝ都市から都市を渡り歩き、青年に立身榮達の實際的智識を敎へたのである。其故何等主張す可き學說を持つて居たわけではなく當時の一般的傾向に順應したものに外ならない。ソピステスの本來の有りの儘の姿は平凡にして何等奇拔な點も無き圓滿なる常識家であつた。其故に其思想は「多くの人々」oi πολλοί が考へる事より一歩も出てゐないのである。ソピステスは好んで群集、民衆、集會等を相手にしやうとした。其處に於てこそソピステスの言葉は怖る可き力を持つてゐたからである。然し其群集、民衆といふは數を問題としたと言んよりは知識を缺除してゐるものと言ふ可きである。ソピスチケーは

個人を相手にしレトリケーは民衆を相手にしたが兩者は本質に於ては變りなく何れも無智なる者を相手としたと言ふ可きである。民衆とは一つの無智なる人間の狀態と考へる事が出來る。多くの人々は「知識は强き導者でも支配者でもない。知識が人を支配するものではなく、寧ろ他のもの謂はゞ或時には激情、或時には快樂、或時には苦痛、又時には戀愛、多くの場合には怖れが左右する、畢竟するに、知識は、奴隷と全く同樣に、其は他一切のものに依つて引摺り廻されるものである」と考へてゐる。「知識が奪はれてゐる事」ἐπιστήμης στερηθῆναι こそソピステスが力を揮ふ事の出來た民衆の本性であり、そして又ソピステス自身の本性でもあつた。人は如何に自發的に行爲する如く見えても若し知識を缺いて居れば其行爲は彼自身の意志に依るものでなく快樂や其他の事に負け ἡττᾶσθαι て「强ひられて」ἄκων 動かされる一つの「狀態」πάθος に過ぎぬのである。更に一切の惡も無智が其原因である。何となれば人は決して惡と知つて「進んで」ἑκὼν 惡を爲すものでなく、强ひられて爲すのであるから。

斯くの如き受働的狀態に在る者は知識を生活の指導者とせず「信」πίστις のみに依つて動き動かされるものである。「知る事無しの信」は僞の原因であり、僞は「心と言葉」διανοίᾳ τε καὶ λόγοις の中に發生する。ソピステスの言葉の術が見せかけの智惠を持

つて居ながら怖る可き力を持つてゐたのも斯くの如き僞の狀態にある人々の間に於てゞあつた。ソピステスは斯くの如き人々の善とする所を善とし向ふ所に向ひ、而して如何にせば其當時の社會に於て人間の自然的慾求たる立身榮達の目的を遂行するに最も有效であるかを敎へた者である。自然から德を區別しながら而も眞に德の德たる所以を認め得ずして德を說きつゝも實は「思慮分別」の敎師であつたプロタゴラスも同樣であつた。雄辯術の敎師ゴルギアスに到ればソピステスの本性は更に大膽に其姿を現はした。カリクレスは職業敎師としてのソピステスではないが彼の都市破壞的思想も自己の力に自負せる多數人 οἱ πολλοί の考へを一步も出てゐない。彼がピュシスの正義とノモスの正義とを區別しながら結局ピュシスの優位を信じた事はプロタゴラスの德に於けると全く同樣であり其所謂「世事に長ける事」はプロタゴラスの「思慮分別」に外ならぬのである。多數人を支配し暴君の如く振舞ふのには先づ多數人に順應する事が必要であつたのに過ぎない。

最早我々はソピステスに別れを告げる可き時となつた。ソピステスは單に生きる事 τὸ ζῆν にのみ沒頭したのであるがプラトンは「生活の救ひ」σωτηρία τοῦ βίου を求めたのである。そして幾多の問題を藏してゐるにせよ「生活の救ひ」を理性的なるもの

に求め「ロゴスを指導者として」進まうとした。諸テクネーは其々エピステーメに依つて偶然的な事柄を支配し統一してゐる。其と同樣にピュシスに屬するものゝ力が如何に强く壓迫しやうとも其偶然的なるものに動かされず却つて之を統制し支配しつゝ生活を眞に救ふ道をプラトンは先づ求めた。然し眞に救ひを求むる心こそ先づソピステスから區別せらる可きプラトンのものであつた。眞に缺乏を知る者にして始めて眞に求むる事が出來るのであらう。自らを智者としたソピステスと自らの無智を知つたソクラテスとは其向ふ所を全く異にしてゐたのである。プラトンが努力した方向が明らかにされる爲めに、ソピステスの理解が必要であつたのに過ぎなかつたのである。（未完）